

Title	非配偶者間人工授精で生まれた人の心理
Sub Title	Identifications of children born through AID
Author	日下, 和代(Kusaka, Kazuyo) 清水, 清美(Shimizu, Kiyomi) 長沖, 暁子(Nagaoki, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.37 (2006. 9) ,p.93- 101
JaLC DOI	
Abstract	In April, 2003, Special Committee on Medical Technology for Reproductive Treatment of Assessment Subcommittee for Advanced Medical Care of the Health Science Council announced their direction to approve the local provision of sperms, eggs, and embryos in Japan and to legislate the rights to know the identifications of children who were born through AID. Such announcement made us to feel that it would be required to understand the current circumstances and thoughts and feelings of those who were born through AID at first, and we conducted a survey by interviewing five persons for that. In order to clearly articulate what they thought and felt, we focused on their emotions expressed during the interview, as well as their feelings embedded in their words for thorough deliberation. As the result, it was clarified that people who had been born through AID and found the truth after they became twenty years old were holding many types of negative feelings such as anger, anxiety, betrayal, enmity, suspicion, distrust, chagrin, irritation, loneliness, sorrow, sense of loss, sense of isolation, and remorse, which drove them into adverse conditions. They also uniformly said that they wished they could have found the truth much earlier. In conclusion, it was suggested that it would be important for parents to tell the truth to their children in their infancy to mitigate their negative emotions and to develop rapport with their children having no hiding. Also, we realized that sympathetically supported self-aid groups or consultations by people with expertise would be essential to maintain the support system for those who are born through AID.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20060930-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

非配偶者間人工授精で生まれた人の心理

日下和代*・清水清美**・長沖暁子***

Abstract :

In April, 2003, Special Committee on Medical Technology for Reproductive Treatment of Assessment Subcommittee for Advanced Medical Care of the Health Science Council announced their direction to approve the local provision of sperms, eggs, and embryos in Japan and to legislate the rights to know the identifications of children who were born through AID.

Such announcement made us to feel that it would be required to understand the current circumstances and thoughts and feelings of those who were born through AID at first, and we conducted a survey by interviewing five persons for that. In order to clearly articulate what they thought and felt, we focused on their emotions expressed during the interview, as well as their feelings embedded in their words for thorough deliberation.

As the result, it was clarified that people who had been born through AID and found the truth after they became twenty years old were holding many types of negative feelings such as anger, anxiety, betrayal, enmity, suspicion, distrust, chagrin, irritation, loneliness, sorrow, sense of loss, sense of isolation, and remorse, which drove them into adverse conditions. They also uniformly said that they wished they could have found the truth much earlier.

In conclusion, it was suggested that it would be important for parents to tell the truth to their children in their infancy to mitigate their negative emotions and to develop rapport with their children having no hiding. Also, we realized that sympathetically supported self-aid groups or consultations by people with expertise would be essential to maintain the support system for those who are born through AID.

* 東京医療保健大学医療保健学部

** 国際医療福祉大学小田原保健医療学部

*** 慶應義塾大学経済学部

I. はじめに

日本の非配偶者間人工授精（Artificial Insemination by Donor Sperm ; 以降 AID とする）は、1948 年に臨床応用されたのがはじまりであり、翌年 1949 年に初の AID 児が誕生し、その後、1 万人の AID 児が誕生していると言われている。しかし、現在まで法的な整備は行われず、産婦人科学会によるガイドラインが作られたのも 1997 年であり、長い間、水面下で行われてきたと言える。そのため、AID で子どもを得た夫婦や、生まれた子どもなどの当事者への精神的なケアや情報提供もほとんど行われてこなかった。また、プライバシーに関する事柄であることから、当事者も口を閉ざしていたため、当事者がどのような問題を抱えているのか、その実態は明らかにされてこなかった。

一方、海外では、AID で生まれた子どもに対し、提供者の特定が可能な情報を提供することを法で定めているところも出てきている。スウェーデンの「人工授精法」(Lag om insemination 1985 年施行)を皮切りに、オーストラリア・ヴィクトリア州「不妊治療法」(Infertility Treatment ACT 1998 年施行)、スイス「生殖補助医療に関する連邦法」(Fortpflanzungsmedizingesetz 2001 年施行)、オーストラリア・ウェスタンオーストラリア州「ヒト生殖技術修正法 2004」(Human Reproductive Technology Amendment Act 2004 2004 年施行)、イギリス「新ヒト受精および胚研究法」(The New Human Fertilisation and Embryology ACT 2005 年施行)などが定められている¹⁾。

日本においては、2003 年 4 月、非配偶者間の生殖補助医療のあり方について検討を重ねてきた厚生科学審議会生殖補助医療部会が、非配偶者の精子・卵子・胚の提供を国内で認可し、子どもの出自を知る権利を認める方針を示した。それによると、「提供された精子・卵子・胚による生殖補助医療により生まれた子または自らが当該生殖補助医療により生まれたかもしれないと考えている者であって、15 歳以上の者は、精子・卵子・胚の提供者に関する情報のうち、開示を受けたい情報について、氏名、住所等、提供者を特定できる内容を含め、その開示を請求することができる。また、当該生殖補助医療により生まれた子が、提供した人に関する個人情報を知ることは、アイデンティティの確立などのために重要なものと考えるが、子の福祉の観点から考えた場合、このような重要な権利が提供者の意思によって左右され、提供者を特定することができる子と、できない子が生まれることは適当ではない。」としている。

このような動きの中で、出自を知る権利の認可の是非を検討すること、また認可後の当

事者を支える体制について検討することは重要である。そのためには、まずは当事者の現状、心理が明らかにされなければいけない。しかし、前述のように AID は 50 年以上の歴史があるにもかかわらず、当事者の現状、心理に関する調査はほとんど行われていなかった。

そこで、本研究は、日本およびオーストラリアの AID によって生まれた人の現状、心理を明らかにし、さらにそれらを比較検討することを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1. 調査対象：調査協力者は、AID で生まれた人、日本人 3 名・オーストラリア人 2 名であり、女性 4 名・男性 1 名の計 5 名であった。日本の研究協力者の中、2 名は筆者らの研究協力の呼びかけに対して、研究者から紹介してもらい、残りの 1 名は 2003 年 11 月に解説したウェブサイト (<http://www.hc.keio.ac.jp/aid/>) での協力依頼に応募した方であった。また、オーストラリアの協力者 2 名は、複数のオーストラリアの研究者を通して紹介された方 1 名および、DI 当事者グループ；DCSG に調査協力を依頼し紹介された方 1 名であった。¹⁾

2. 調査方法：半構造化面接（インタビュー）を行い、それを録音し、逐語録を作成した。事例 C と D は、2 年近く間隔を空けて 2 回インタビューを実施した。調査内容は、対象者の基本的属性・AID によって生まれた事実を知るきっかけ・知った年齢・誰から事実を聞いたのか・事実を知る前の違和感・知ってからの変化・現在の父親や母親との関係・精子提供者に関すること・AID で生まれたことを知らされてどのように思うか・どんな支援や情報がほしかったか・提供者に会いたいと思うか・現在の法制度について・自助グループについてであった。

3. 調査期間：2003 年 8 月～2005 年 7 月

4. 分析方法：インタビューで語られた内容は、質的・帰納的アプローチを用いて分析した。データを質問項目ごとに分類し、コード化し、さらに当事者の心理を明らかにするために、感情に焦点を当てて、カテゴリー化を行った。また、その感情の変化についても検討した。感情についての分類は、宮本の“感情を「読み書き」する力”を参考にした²⁾。

5. 倫理的配慮：調査協力者には、文書および口頭で、研究の説明を行い、公表に際してはプライバシーや匿名性に配慮することを約束し、研究協力の同意を文書および口頭で得た。

Ⅲ．結果および考察

1. 属性

調査協力者 5 名の基本的属性および告知に関する内容を表 1 に示した。

表 1 調査協力者の属性 (N=5)

事例	国籍	性別	インタビュー実施日	インタビュー時年齢	事実を知った時の年齢	出生の事実を知ったきっかけ	兄弟姉妹	婚姻関係
A	日	女	① 2003 年 8 月 ② 2005 年 7 月	20 代	23 歳	父親の遺伝的病気	なし	なし
B	日	男	① 2003 年 8 月 ② 2005 年 6 月	20 代	29 歳	血液検査	なし	なし
C	日	女	2004 年 3 月	30 代	32 歳	父母の離婚	なし	あり
D	豪	女	2003 年 8 月	20 代	5 歳	父母の告知すべきとの考え	あり	なし
E	豪	女	2003 年 8 月	20 代	20 歳	父母の離婚	あり	なし

また、調査協力者の現状については、以下のようである。

- * 協力者 A：父親とは、希薄な関係だったが、父親が遺伝的な病気となり母親から告知された。当初は怒りなどの多くの否定的な感情を表出していたが、徐々に母親への理解も深まり、現在は、怒りも消失している。
- * 協力者 B：父母とは良好な関係であったが、血液検査をきっかけに母親に告知されてからは、素直に「お父さん」と呼べなくなり、また、精子提供者を探している。
- * 協力者 C：父親を嫌っていたため、母親から告知されてほっとした。しかし、自分の存在への不安を持っている。
- * 協力者 D：5 歳の時に、両親そろって告知された。家族は仲がよく、親子関係は大変良好である。精子提供者を捜している。
- * 協力者 E：20 歳の時に、母親から告知された。両親が離婚したため父親との関係は希薄となったが、精子提供者と出会うことができ、親交を深めている。

協力者のインタビュー時の年齢は、20～30 歳代で、事実を知った年齢は 5～32 歳であり、事実を知ってから 1～15 年が経過していた。兄弟姉妹が、有る人は 2 名で、3 名はいなかった。結婚しているのは、1 名で、結婚していないのは、4 名であった。

AID によって生まれた事実を知るきっかけは、父母の離婚が 2 名、父親の病気が 1 名、

血液検査が1名、両親による告知が1名であった。先行研究においても、AIDで生まれたことを知るきっかけとして離婚などの家族的葛藤、育ての父の死や家族内の遺伝性疾患が発現した際が挙げられており、本研究と同じ結果が得られた。さらに、先行研究では、子ども自身が親との関係が不自然だと思って問いただした結果もあった³⁾。一方、本研究では、血液検査が知るきっかけとなっていたが、DNA診断の普及により今後増える可能性があるものと思われる。

誰から事実を知らされたのかは、父母が1名、母親が4名であった。事実を知る前の違和感としては、「父親との関係が親密ではなかった」が2名、「家族内の息苦しさ」が1名、「秘密がある感じがした」が1名、「何も感じなかった」が1名、などがあつた。

事実を知った時は、「驚いた、ショックだった」が4名であり、さらに、その他の多くの感情を抱いていた。5歳の時に、両親の告知すべきとの考えによって、両親から告知されたDは、驚きやショックなどの否定的な感情を感じることなく、その事実を自然に受け入れており、その後、親子関係も親密で良好に経過しているようであった。

また、先行研究においては、AIDで生まれた人は、家族への不信感・自分が人とは異なり否定的な特殊性を持つという気持・遺伝的連続性が欠けている感じ・生物学的な父親を探すことを邪魔されることへの不満や苛立ち・理解者に語りたい気持を持っており、さらに、真実を受け止め、新しいアイデンティティを消化しようと煩悶していた⁴⁾。

2. 否定的な感情

著者らは、協力者が事実を知ったことによって多くの感情を抱き、表出していることに着目し、特に感情に焦点を当てて、分析を行った。感情は、主に肯定的な感情と否定的な感情に分けられるが、事実を知った後に表出された否定的な感情を、表2に示した。

否定的な感情は、驚き・困惑・混乱・怒り・裏切られた感じ・恨み・疑い・不信・悔しさ・苛立ち・不安・寂しさ・悲しさ・喪失感・孤独感・自責感・辛さなどが抽出された。

特に怒りは、出生を隠されていたこと、今まで告知してもらえなかったことに対する怒りであり、AIDで生まれたことを隠されると出生そのものを否定されているのではないかという怒りであり、嫌悪感であった。また、怒りの矛先は、隠していた母親・産ませっぱなしの医師・AIDそのものに対して向かっていた。

不安は、自分のルーツの2分の1が分からないことに対する不安であり、2分の1のルーツが分からない人間が生きている価値があるのだろうかという不安であり、さらにその自分が子どもを生んでよいのか（子どもは4分の1のルーツが分からない）という不安で

表2 否定的な感情

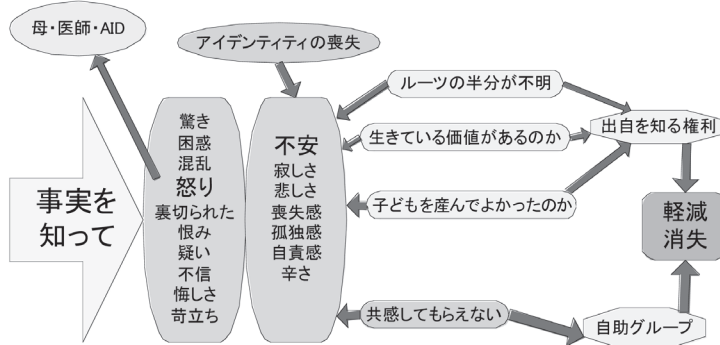
カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
驚き	自分がAID で生まれたこと	不安	漠然とした不安
	父親と血縁が無いこと		自分の半分のルーツが分からない
困惑	自分がAID で生まれたこと		自分の存在への不安
	ずっと自分に隠されていたこと		生きている価値があるのか
混乱	自分がAID で生まれたこと		体質的な異常があるかどうか
	何も手につかない・眠れなくなった		父親像の喪失
怒り	ずっと自分に隠されていたこと	寂しさ	自分の半分のルーツが分からない
	だまされていた	悲しさ	自分の存在への不安
	何でAID を選んだのか		自分の半分のルーツが分からない
	何で産んだのか		生きている価値があるのか
裏切られた感じ	自分が実験台に使われた	喪失感	自分の半分のルーツが分からない
	ずっと自分に隠されていたこと		帰れる場所（家）が無くなった
恨み	だまされていた	孤独感	父親像の喪失
	何も手につかない・眠れなくなった		帰れる場所（家）が無くなった
疑い	何で産んだのか		共感してもらえない
	何でAID を選んだのか	自責感	自分が存在してよいのか
不信	だまされていた		いけないこと（AID）で生まれてきたのか
	自分が実験台に使われた		作られて生まれてきた
悔しさ	自分の気持を分かってもらえない		生きている価値があるのか
	自分が実験台に使われた		（自分が）子どもを産んでよかったのか
苛立ち	自分の気持を分かってもらえない	辛さ	悩んでよいのか分からず辛かった
	だまされていた		素直に「お父さん」と呼べなくなった
	何でAID を選んだのか		AID を否定すると自分を否定することになる

あった。また、男性の場合は、生活を共にしている父親と血縁が無いことで、父親像を喪失してしまったことによる不安であった。

自責感は、「自分は作られて生まれてきた」「自分が存在してよいのか」「子どもを産んでよいのか」という自分の存在に対する自責感であった。また、AID で生まれたことを周囲の人たちから隠されていたことによって、自分だけが知らされなかったという孤独感を抱いた人もあった。

否定的な感情を図1に示した。「自分のルーツがわからない」「生きている価値があるのか」「子どもを産んでよかったのか」などの感情は出自を知る権利が認められることによって、また「共感してもらえない」という感情は自助グループなど同じ立場の人との共感によって軽減される可能性がある。

図 1 否定的な感情



3. 肯定的な感情

一方、事実を知った後に表出された肯定的な感情を、表 3 に示した。

肯定的な感情は、安心感・嬉しさ・開放感・安堵感・親密感・幸福感などが抽出された。「AID で生まれた事実を知らされてよかった」「嬉しかった」「嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった」「疑問が解け、解放された感じがした」「母親が AID の講演会に来てくれてほっとした（告知後こじれた関係の修復）」「父親を理解したい気持ちが芽生えた」「母に大事にされ、愛されていると思った」などであった。また、母親への怒りは無く、母親がもっと早く打ち明けていれば、もっと楽であったろうに感じていた人もいた。

表 3 肯定的な感情

カテゴリー	サブカテゴリー
安心感	AID で生まれた事実を知らされてよかった
	AID で生まれた事実を知らされて嬉しかった
	嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった
	疑問が解け、解放された感じがした
嬉しさ	AID で生まれた事実を知らされてよかった
	AID で生まれた事実を知らされて嬉しかった
	嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった
開放感	嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった
	疑問が解け、解放された感じがした
安堵感	嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった
	疑問が解け、解放された感じがした
親密感	母親が AID の講演会に来てくれてほっとした（告知後こじれた関係の修復）
	父親を理解したい気持ちが芽生えた
幸福感	母に大事にされ、愛されている
	嫌いな父親と血縁関係が無くてよかった

4. 感情の変化

研究協力者が、事実を知ってから抱いた感情は、時間とともに徐々に変化した。

母親への感情の変化をみると、事実を知った際に母親に向かっていった怒りは、母親の気持や母親のその頃の状況を理解できるようになった結果、消失していった。徐々に、母親を許せると思うようになり、わだかまりが少なくなっていく。また、言いたいことがいえるようになり、怒りは徐々に消失していったようである。

一方、父親への感情の変化を見てみると、知らされる前より、「オープンになったので、話しやすくなった」「もっと早く知っていれば良い関係が作れた」「愛情を感じられなかったが、理解してあげればよかった」「もともと関係は良かったので、変わらない」「より関係が希薄になった」「肩の荷がおりた」など、さまざまであった。また、告知以前に父親との関係がよくなかった人は、父親への感情は程度の差はあれ好転していた。

5. 事実を知って

事実を知ってよかったかどうかの質問に対しては、全員が良かったと答えていた。その内容は、「そんなにしてまで（AID をしてまで）欲しかったのかと聞いてよかった」「もっと早く知っていた」「原因が分かっていたら、もう少し家が過ごしやすかった」「大人になって知る方が、ショックや哀しみが大きい」「長い間かけて獲得したアイデンティティの修復は難しい」などであった。先行研究においても、調査対象者全員が、「もっと早く知らせて欲しかった」と、早期の告知を望んでいた³⁾。また、『British Medical Journal』誌に掲載されたAIDによって生まれた女性も、「事実を告げられてよかった」と述べていた⁵⁾。

古澤は、嘘偽りの無い関係、それも抽象的な真実ではなく、実際に親子が同じ思いで過ごし合った経験こそが親子の絆、そして人間同士の信頼の基盤であると述べている⁶⁾。また、渡辺は、信頼の揺らぐ関係からは、安定した家族も社会も生まれ得ない、子どもは、親だけでは育たない、親の愛情だけでは支え切れぬものを社会が支えることが現実的な課題であると述べている⁷⁾。

したがって、AID で生まれた人に対しては、両親による早期の告知が必要であり、親子の信頼関係を築くこと、さらに、偏見の無い社会を形成することが重要であると考えられる。

Ⅳ. おわりに

本研究は、AID によって生まれた当事者の現状、心理を明らかにすることを目的として、調査協力者 5 名を対象として面接調査を行った。当事者の意識を明らかにするために、インタビューの中で表出された感情表現と言葉の背後にある感情に焦点を当てて考察した。

その結果、AID で生まれ 20 歳以降に事実を知った人は、出自を知った後に、怒り・不安・裏切られた感じ・恨み・疑い・不信・悔しさ・苛立ち・寂しさ・悲しさ・喪失感・孤独感・自責感などの多くの否定的な感情を抱き、辛い状況に追い込まれていることが、明らかとなった。また、彼らは、一様に、もっと早く、事実を知りたかったと語っていた。

結論として、出自を知る権利が認められ、生物学的な父親を知ることができれば、AID で生まれた人の不安や喪失感などの否定的な感情は軽減されると思われる。また、幼児期の両親による告知は、怒りや不信などの否定的な感情を軽減させ、隠し事の無い両親との親密な信頼関係を築くためにも重要であることが示唆された。さらに、AID で生まれた人にとっては、共感を支えにした自助グループの存在や専門知識をもった人による相談などの支援体制の整備も不可欠であると考ええる。

<文献>

- 1) 長沖暁子他 2006：『AID 当事者の語りからみる配偶子・胚提供が性・生殖・家族観に及ぼす影響』、平成 15～17 年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書
- 2) 宮本真巳 2005：「感情を「読み書き」する力」、『精神科看護』32 巻 9 号, 18-27
- 3) Mc Whinnie A. 2001: Gamete donation and anonymity; Should offspring from donated gametes continue to be denied knowledge of their origins and antecedents. Human Reproduction, 16 (5), 807-817
- 4) Turner AJ, Coyle A. 2000: What does it mean to be a donor offspring? The identity experience of adults conceived by donor insemination and the implication for counseling and therapy. Human Reproduction, 15 (9), 2141-2052
- 5) No authors Listed. 2002: How it feels to be a child of donor insemination. British Medical Journal, 324 (7340), 797
- 6) 古澤頼雄 2001：「親と子の心のふれあい、若年養子という選択」特集第 4 回 FOUR WINDS 全国大会報告, Four Winds News Letter
- 7) 渡辺久子 2002：「生殖補助医療で生まれた子どもの心」『助産婦雑誌』, 56 巻 2 号, 43-49